

## メッセージアウトライン マタイの福音書3：1～12 「天の御国が近づいた」

[1-2]「そのころバプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べ伝えて、『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』と言った」

「そのころ」とは2章のヨセフが幼いイエスとその母マリアを連れて、滞在していたエジプトを出てガリラヤのナザレに住んだ時から30年近くが経過したところである。イエスがおよそ三十歳になられたであろうその時に、バプテスマのヨハネという人物が突然登場してくる。彼は誰か。

彼については→ルカ1:5～17, 80節

「天の御国」とは神による支配そのものを意味することばである。神による支配、メシアの到来が間近であるとヨハネは宣言しているのである。マタイは読者であるユダヤ人が「神」ということばを用いることを恐れ多いこととしていたので→出20:7、申命記5:11、「神」の代わりに「天」ということばを用いている。マルコは「神の国」としている。→マルコ1:15

当時はローマ帝国が支配するAD30年ごろの時代で、日本では弥生時代にあたる。しかし、ユダヤにおいては、救い主の到来、世界の審判、神の支配する国が今にも現れるという風潮が増大していた。BC8世紀にユダヤで預言者として活動したイザヤはイスラエルの真の神を信じようとしないイスラエル人とその王たちが戦いに負け、バビロンに捕え移されることを預言した後で、やがてバビロンから解放されて帰還する慰めの時が来ることを約束した。救い主が自ら捕らわれの民の先に立ち、荒れ果てた祖国に連れ戻してくださる。そしてそしてその救い主のための道をバビロンからユダヤまで荒野にまっすぐに備えよと預言したのである。→イザヤ書39～40章。

ユダヤの特に愛国主義者たちは自分たちの時代の腐敗した同胞がローマの手先になって動いているその有様を目にして、まさに自分たちの時代こそローマ帝国という第二のバビロンに捕らわれの身となっているとみて、自分たちこそ来るべきイスラエルの救い主のために道ぞなえをしなければならぬと考えていた。この時代の前後にも多くの反乱、独立戦争などが起こり、ユダヤの政情は騒然としており、まさに救い主の到来、世界の審判、神の国出現の機運が満ち満ちた時代であったと言える。

このような時にバプテスマのヨハネがユダヤの荒野に現れ、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と叫び、その教えを宣べ伝えたのである。「ユダヤの荒野」とは死海西岸に広がる荒野地帯であり、かつてダビデがサウル王に追われて逃げていたときに滞在していた地でもある。

ヨハネは旧約時代のBC9世紀に北イスラエル王国の信仰復興のために活躍した預言者エリヤと同じ役割を持って世に出て来た人物であった。エリヤは贅沢三昧にふけり、真の神を捨てて偶像礼拝に走り、道徳的にも墮落し、目の前のことのみを追い求め、罪に罪を重ねていた王と民を悔い改めさせるために、毛皮の衣を着て腰に皮帯を締めるという質素な姿と生活態度をもって、人々に不信仰で、神の選ばれた民としてふさわしくない間違った生き方を改め、真の神のもとに帰るように、烈火のごとく迫ったのであった。→ I 列王記17～II 列王記2章

そして、このエリヤの再来としてバプテスマのヨハネが登場したのである。「バプテスマ」とは洗礼のことで、水に浸したり、水を注いで洗うことであり、それは人々の罪ある生活を悔い改めさせ、身も心も洗い清めることを象徴する儀式。ユダヤには昔からこうした沐浴や水による洗いの習慣があったが、ヨハネによるバプテスマは罪や汚れを発見するたびに反復する水による洗いではなく、悔い改めを告白したときに、ただ一度だけ行われるものであった。それゆえ、このバプテスマは意味も分からずに受ける盲目的な儀式ではない。1節からも分かるようにヨハネはまず教えを宣べ伝えてから、この儀式を行った。それゆえ、説教を聞いて、理解し、信じ、従ってこそバプテスマを受ける意義がある。口で語られた説教を耳で聞き、心で信じ、口で悔い改めを告白した後、それを実際に目で見るとしてこの儀式は行われたのである。

[3-4]「この人は、預言者イザヤによって『荒野で叫ぶ者の声がある。主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ』と言われた人である。このヨハネはらくだの毛の衣をまとい、腰には革の帯を締め、その食べ物はいなごと野密であった」

このイザヤの預言はイザヤ書40:3節で旧約の時代、パレスチナ地方は道路事情が非常に悪く、道路とは名ばかりで、雨が降れば泥沼となり、川となる。日照りが続けば道は荒れ放題に荒れ、山賊も出没する。それで当時は旅をするということは命がけであり、知り合い全部に別れを告げて出発するという状況であった。しかし、このような道も王が旅する時には彼の富と権力を示すために修理され、場所によっては黒い玄武岩を敷き詰めたと言われている。また遠くの地方においては王のた

めに道を整えるようにとの通達が出された。そのようにバプテスマのヨハネは王のために道を整える役割を持って来たのである。

ユダヤの愛国者たちは国に反乱を起こして破壊するか、あるいは自分で自分の道をまっすぐにしようとしたのに過ぎない。しかし、ヨハネの目的は、そのような自分で自分の生活をまっすぐにすることではなく、人々を悔い改めさせ、荒野のごとく荒れすたれた人々の心をイスラエルの主なる神に対して備えさせることにあったのである。彼だけが荒野で叫ぶ者の声であり、預言者エリヤの再来であった。彼もまた裕福な者たちとは正反対のエリヤと同様の質素な服装と生活をしていた。

[5-6]「そのころ、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川周辺のすべての地域から、人々がヨハネのもとにやって来て、自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた」

ローマに対する反乱などの不穏な政治状況と混乱の中で、人々はこのままではいけない、自分の罪の問題を清算し、生き方を改め、先祖以来のイスラエルの神に従わなければとの思いに駆られて、ヨハネの叫びに応じてやって来た、それも多くの地域から来たのである。そして彼らは自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けたのであった。

[7-8]「ヨハネは、大勢のパリサイ人やサドカイ人が、バプテスマを受けに来るのを見ると、彼らに言った。『まむしの子孫たち、だれが、迫りくる怒りを逃れるようにと教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。』」

パリサイ人とは律法の教えを厳格に守ろうとしている人々であるが、しばしばそれに心がともなわない偽善的なものになり、街頭で祈り、人々の関心を引くことや、宴会の上座を好み、金銭を愛する生活に落ち込んで行くことがあった。サドカイ人とは神殿で仕える祭司階級や富裕な階層の者が多く、死よりの復活や天使や霊の存在を否定し、理性によって確証されない教理はすべて否定した。パリサイ人にもサドカイ人にも共通な点は、彼らが旧約聖書に書かれている律法と様々な儀式、まつりごとを守ることによって救いがあると信じていたことである。ユダヤ人の最高法院サンヘドリンにはこの両派の者たちが多くいた。→使徒23:1-8

そのようなパリサイ人やサドカイ人が大勢ヨハネのところにやって来たが、なんとヨハネは彼らをまむし呼ばわりして叱責した。それは彼らのヨハネのところに来る動機が間違っていたからである。彼らは自分の生き方を悔い改めるためではなく、ユダヤの民衆がヨハネを預言者と認めているので自分たちも民衆に迎合しようとして

外見だけをまねようとしてやって来たのである。彼らが最も心配するのは民衆のこのような行動によって、自分たちの地位が脅かされることであつた。

ヨハネは彼らの動機を見抜いており、「だれが、(神の)迫りくる怒りを逃れるようにと教えたのか」と言う。これは彼らの生き方では神の怒り、さばきを逃れられないということであり、必要なことは真の悔い改めであり、それにふさわしい実を結ぶことである。悔い改めとは神のみこころにかなわない生き方から方向転換し、神のみこころにかなった新たな正しい道に進むことであり、それはおのずとそれにふさわしい実を結ぶことになるのである。

[9-10]「あなたがたは、『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で思つてはいけません。言つておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。斧はすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます」

悔い改めにふさわしい実は、自分にそんな力があるとか、われわれの先祖は神によって選ばれたアブラハムだなどと考えるその高ぶった心そのものを打ち砕くところから始まる。自分は神の前に全く無力で罪深いことを率直に認める必要がある。そうすれば自分が実を結ぶために何とかするといった自力本願の心もなくなり、心の砕けた、ただ神にのみ望みを置く者となる。そしてその悔い砕けた心こそ、何よりも良い実なのである。9節では「神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです」と言われている。私たちは石ころのような手も足も出ない無力な自分をただ神に任せて信頼していく、そういう謙虚な神に対する信頼こそ最も良い悔い改めにふさわしい実なのである。「斧はすでに木の根元に置かれている…」とは悔い改めにふさわしい実を結ばない者に対する警告である。私たちはその警告の対象にならないように心しなければならない。

[11-12]「私はあなたがたに、悔い改めのバプテスマを水で授けていますが、私の後に来られる方は私よりも力のある方です。私には、その方の履き物を脱がせて差し上げる資格もありません。その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。また手に箕をもって、ご自分の脱穀場をきよめられます。麦を集めて倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます」

ここでヨハネは自分の後に来られるお方について紹介する。その方はヨハネよりも力のある方であり、自分はその方の履き物を脱がせてあげる資格もないと謙遜する。パリサイ人やサドカイ人に対して「まむしの子孫たち」と大声で叱責した時とは

大違いである。その方は自分の授けている悔い改めのバプテスマとは違うバプテスマを授ける方であると言う。それは聖霊と火とのバプテスマである。聖霊は父、子、聖霊の三位一体の神の聖霊なる神のことであり、聖霊の働きによって、人は悔い改め、信仰を持ち、新しくされ、神のみこころにかなった歩みをする者とされる。→ヨハネ3:5~6

ヨハネのバプテスマは悔い改めのしるしとして人々に授けたが、そのヨハネの紹介するお方は聖霊によるバプテスマを授け、それは信じた者のうちに働き、信仰者としての新たな歩みに進ませるのである。火のバプテスマとは火がすべてのものを焼き尽くすように、神のみこころにかなわない古い肉にある罪深い生き方を焼き尽くし、神のみこころにかなった生き方に進ませることを意味する。→ガラテヤ5:16~26

12節のことばは世の終わりに臨む神の最後の大審判のことを示している。箕とは麦と殻をふるい分ける道具であり、その道具で収穫した麦を風の良く通る麦打ち場で空中に投げ上げ、実は下に落ち、殻は風で飛ばされて二つに分けられるのであった。「殻を消えない火で焼き尽くされる」とは神を知らず、神に逆らい、自己中心で罪深い生き方を最後まで続けていた者が世の終わりにその生き方の結果として受ける厳しいさばきのことである。→黙示録20:11~15

このお方は最後の大審判のさばき主、主役でもあることが分かる。

ヨハネの役割も、彼のバプテスマの意義も、ひとえにこの世の終わりの神のさばきを免れるために「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」ということばに要約されているのである。